
腹ペコ冒険譚

金枝 那里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腹ペコ冒険譚

【Nコード】

N2202P

【作者名】

金枝 那里

【あらすじ】

エレクの告白の最中に、ラルは魔王に攫われた。俺たちはラルを助けるため、魔王城へと向かうことになる。型破りなエレクと俺のよくある冒険物語。

魔王に攫われた超絶美少女（エレク視点）を助けに行く話です。世界観はRPGゲーム寄り。

本筋は王道です。馬鹿馬鹿しい話なので、お暇つぶしにどうぞ。

俺は目の前の光景に口を開けて呆然としていた。

だってそうだろう？ 目の前には奇妙な構図ができあがっているのだ。

まず、目の前には珍妙な白い服を着た男。幼なじみ兼親友のエレク。胸にさしていた赤い薔薇をラルルに差しだし、跪く格好。

そのエレクの対面にラルル。恥ずかしげに口を覆っている が、俺は知っている。あれは笑いを堪えている顔だ。

そのラルルの背後に人外 魔物。いや、自称魔王だったか。後ろからラルルをかき抱き、勝ち誇ったように嘲笑している。

そして、それらを呆然と眺める俺。

何なんだこの状況。

「ふはははは、勇者よ。この女はもらっていく。女を返してほしくば、俺の城までたどり着くことだな！」

「ラルル！ 君のために修行してきた！ 結婚してくれ！」

エレクは自称魔王を無視してラルルにプロポーズした。完全にラルルしか見えてない。長いつきあいだから分かる。あいつは思い込んだら一直線だ。

しかし、最近平和だと思っていたら、修行なんてしていたのか。

何考えてんだアイツは。確かに、ラルルは軟弱な男は嫌いだが。

「やっかいな芽は早めに摘んでおくに越したことはないからな！

俺は計画的な人生設計を考えられる魔王なのだ！」

さらに嘲笑。情けないことを言う自称魔王だな。要は、弱いうちに準備万端な城におびき寄せ、数の暴力で叩きのめすということじゃないか。

まあ、最近は魔王不在だったから、こいつも最近魔王に就いたばかりなのだろう。手近なところでもとりあえず箔をつけたいのかもし

れない。

「君にふさわしいだけの能力を身につけたんだ。炊事洗濯掃除に裁縫……」

魔王の言葉は全く無視。エレクは高らかと宣言し始めた。

「とうか、おまえ、何の修行してきたんだ。」

どうでも良いが、ラアルはあれでも一応家族の一員だ。黙って攫われては困る。幸いなことに、自称魔王はラアルをただの女だと思っ
ているようだ。隙を突けば拘束から逃れることは可能だろう。

逃げ出すように指示するため、ラアルに視線を移す。

ラアルに逃亡を促そうとすると

ラアルはにっこりと微笑み、ぐっと親指を立てた。

「……」

要約。

楽しそうだから、攫われてみる。助けに來い。

お……、おまえええ！

「では、我が城で待っている！ 我が精励部隊が手厚く出迎えよう。せいぜい足掻くが良い！」

再び嘲笑。自称魔王はそう言うと、ふつと姿を消した。

「波の音が聞こえる白い家で……子供は十二人くらい。いや、結婚数年は二人きりで甘い時を……あれ？ ラアル？」

「おまえ……本当にラアルしか見えてないのな。お前が妄想世界にトリップしてる間に自称魔王が攫っていったよ」

「何イ！？ 自称魔王だと！？ 俺たちの仲を裂くなど、なんて空気の読めない奴なんだ。これからハナムーンの予定だったのに！」

「いつラアルがプロポーズを了承した。勝手に結婚してんじゃねえよ」

エレクは差し出していた薔薇を胸ポケットに戻してこちらに向き直った。

「シスコンとして認めたくないのは分かるが、事実だ」

「シスコンじゃねえ！ とうか、そもそも事実じゃねえよ！ 何

勝手に脳内会話で結婚成立させてんだ」

「脳内じゃねえよ！ 俺には聞こえたんだ！ ラアルの心の声が！」

「それ結局おまえの妄想じゃねえか！」

「妄想じゃねえよ！ 心の声だっつってんだろっが！ ラアルの俺を見つめる熱っぽい視線にだな『言葉はいららない。今すぐあなたの胸に飛び込みたい』っていう熱い想いがだな……」

「ねえよ！ どこまで周りが見えてないんだ！ いい加減ラアルを追いかけるのはやめろっって言ってるんだろ」

「またその話か。まあ、あんな可愛い妹持ったら心配なのは分かるが。安心しろ、俺なら幸せにしてやれる」

「そういう問題じゃないっって言ってるだろうが。そもそもアイツは」

「分かってるって。天使だっつてんだろ？ 分かってる、愛は種族を越える。見てろ」

エレクはばちんと片目を瞑って見せた。

気持ち悪い。

「見てろ、じゃねえよ！ なんだ天使つてのは」

「ん？ 違ったか。女神様だったか？」

「どつちも違え！ そもそもアイツが女神だったら俺は神様か。どっただけ意味不明な妄想なんだよ」

「あーあー、分かってる分かってる。皆まで言うな。おまえら血はつながってないっつて奴だろ？ ある日ドアを開けたら足下に『可愛がってください』ていう」

「それは犬猫だろうが！」

「犬だと？ ラアルは確かに可愛いが、動物と一緒にすんじゃねえ！」

「一緒にしたのはおまえじゃないか！」

「俺がラアルと犬猫と一緒にする訳ないだろうが！」

エレクが憤慨する。

落ち着け、俺。話が脱線しまくりだ。いい加減、話が進まない。

「待て。今はラルルについてどうこう言ってる場合じゃない。自称でも魔王に攫われたんだ。どうにかしなきゃならないだろ」

「そうだった！ラルルを助けにいかなきゃな」

「だろ？まずは国に連絡を取り付けて、騎士を手配してもらってだな……」

「さ、行くか」

エレクはそのまま村の入り口方向へ歩きだした。

「待て、どこへ行く」

俺は慌ててエレクの腕を掴む。

「あ？魔王城だよ。そこにラルルがいるんだろ？」

眉を寄せて振り返るエレク。さも当然というような表情。案の定、単身魔王城に乗り込むつもりだったようだ。

いい加減お前は俺の話の聞き。とりあえず最後まで聞け。そして理解しろ。

「なんでそうなるんだよ！自称とはいえ魔王だぞ？俺ら一般人がどうこうできる相手じゃないだろ」

俺もエレクも一般人だ。多少体力に自信があるとはいえ、魔物相手に戦ったことすらないのだ。たとえ自称であろうとも、それなりに知能の高い魔物相手に戦って勝てるとは思えなかった。

魔王が勇者だなんだ言ってたのは気にしない。なんかの間違いだろ。俺もエレクも普通の農村の普通の家の子供だ。

「クレッツ」

エレクは俺をじつと見つめた。

「な……なんだよ」

思わずたじろぐ。

なんだよ、そんな責めるような目で見るなよ。俺だってラルルは心配だよ。いくら性格に難ありとは言え、肉親なんだからな。別に見捨てようとかそういつつもりはないんだ。ただ、俺らの力じゃ無謀だってだけで。

「愛の力は無敵だ」

「だからそれが無謀だつて言つてんだよ！」

「今こそ、修行の成果を見せるとき！ むしろ、惚れ直させるチャンスじゃね？」

「お前、修行つて家事しかやってないだろーが！ てゆーか、俺の話聞け！」

というか、そもそもラルはエレクに惚れてすらいないだろうが！

「よっしゃ、漲ってきた。いざ行かん！ 魔王城へ！」

エレクは叫びながら、走り出した。

「ちょ、待て、おい！」

相変わらずエレクは俺の話聞かない。既にエレクの姿は米粒となつている。

ちよつと、もうさ……。放つといていい、かな。

いや。

腐つても幼馴染。腐つても肉親。見捨てるわけにはいかないだろ。俺は甘い誘惑を頭を振って振り払う。

かくして、俺は魔王城へと旅立つことに。いや、魔王城へ旅立ったエレクを止めるために村を出ることになった。

走り去つたエレクの方向へと足を進める。既に米粒となつていたエレクだったが、意外に早く追いついた。

「うおらあああ！」

魔王の刺客か野良魔物か。エレクは群がる魔物を薙ぎ払っていた。「俺らの愛を阻むものは容赦しねえ！」

叫ぶ言葉は脱力ものだが。

エレクの周りを円で囲むように魔物。瘴気をまとつた黒い狼のよくな生き物。逃げ場も死角もない状況で、エレクは魔物と対峙していた。

「……………」

目の前を魔物一匹。瘴気をまとった狼のような獣が襲いかかる。微かに身を引いて避けると、魔物は標的を定めたかのように俺を睨みつける。

あーあーあー。完全獲物認定されたよコレ。俺、何も武器持っていないんだけど。

いや、エレクも素手なだけでさ。何故か手刀で魔物一刀両断にしてるけどさ。あ。今片手で魔物の頭捻り潰した。蹴りでどてっ腹に穴あけた。何アイツ、もう化け物じゃね？

「アイツと違って俺は一般人ですよ……っ」と

飛び掛る魔物を避け、注意深く回りに目を走らせる。何か武器になるもの　ん、小枝発見。

「さあ、来い。魔物！」

武器ひのきの棒　ならぬ小枝で構えてみせる。わあ、俺マジダセえ。

弱そうだと思われたのか。魔物は俺に向かって走り出す。速度を上げる魔物。迫り来る牙。湧き上がる怯えを必死で押さえ込む。まだだ。もう少し引き付けて

その目に小枝を突き刺す。

魔物は咆哮を上げて転がった。

小枝は細く脆い。魔物の体を突き破るだけの耐久性はない。だが、目玉は違う。どんな動物だって、目玉はやわらかい。ここを突けば脆い小枝でも脳髓までダメージを与えることが出来る。

よっしゃ、倒した！

動かなくなつた魔物にほっと息をつき、エレクへと視線を向ける。そこに広がる光景に、俺は息を呑んだ。

「……嘘だろ」

死屍累々。黒いドーナツ。円状に出来た魔物の絨毯。その中央で、エレクは立っていた。

「あ、クレッツ。何しに来たの？」

飄々とエレクは片手を上げて挨拶をした。まるで、久しぶりに会った友人に対するように。

「何しに来たの、じゃねえよ！勝手に行動するな！」

「えー。だって早くラルル助けねえと駄目だろ？」

「そうだが 確かにそうだが ！」

二の句が告げない。確かにラルルは心配だ。助け出すなら早いに越したことはない。

「それに、早くしないとラルルの貞操が危ない！」

「それはない」

頭が痛い。ラルルの貞操が危ないわけねえだろうが！

「なんでだよ。いくら種族が違うとは言え、ラルルの可愛さは桁外れだ。あれを前に正気でいられる男などいない！」

「確かにラルルは愛らしい容姿をしてる。してるが 貞操の危機などありえないだろうが。いい加減にだな、俺の話を」

エレクはぼんとかぶしを叩いた。

「そうか！ 天使と魔物はいわば敵対関係だからか！」

「違え！ 違えよ！ なんでそうなる。っていうか、天使と敵対関係なのはどちらかといえば悪魔だろうが。」

もういい……俺はエレクの説得を諦めた。

「分かった。もう何も言うまい。それよりお前、なんでそんなに強くなってるんだ？ 前からそんなに強かったか？」

確かにエレクは以前から身体能力が優れているほうだった。しかし、それでも一般人レベルだ。手刀で魔物を真っ二つにするほどの常識外のレベルではなかったはずだ。

「お、クレッツ。あれなんだ？」

「人の話を聞けー！」

エレクは近くにある小さな祠に近づいた。そこにはお供え物のつもりか、食べ物が添えられていた。あれは干し肉か。

「クレッツ。これ……」

エレクは干し肉を手に取り、俺に視線を向けた。食べてもいいものか迷っているのだろう。見た目は問題なさそうだが、飯にもお供え物だしな。

「そうだな。これからのこともあるしな。一応断ってから頂戴するか」

あまり行儀のいいものではないが、奉られてる存在も、もう充分干し肉を堪能しただろう。神も鬼ではない。手を合わせて断れば、罰も当たるまい。

手を合わせて祈るべく、祠へ近づく。しかし、その歩みはエレクの言葉によって遮られた。

「ラルの手料理だよな！」

「なんでそうなる!？」

またとんでもないことを言い出した。そもそも、干し肉は料理と言えるのか。

「攫われつつも俺の身を案じてくれてたんだよ！ 魔王の目を盗んで俺のために干し肉を置いてってくれたんだ……さすがラル。俺、絶対にお前の愛に応えるよ！」

「……………」

エレクは干し肉にかぶりついた。ちよ、待て。俺の分を残せ。俺が止める間もなく、エレクは干し肉を平らげた。

一言文句を言おうとエレクに視線をやり、口を開けたまま固まった。

エレクの姿が光り輝いていた。どこからともなくファンファールの音が鳴り響く。

「え、ちよ、おま、エレク!？」

常識はずれの現象に混乱する。どうなってんの、これ？ ていうか、エレク、体大丈夫か!？

突然、エレクの目の前に文字が浮かび出る。

エレクはレベルが10上がった!

エルクはレベルが678になった！

爆流火山を覚えた！

力が999になった！

賢さが28になった！

素早さが753になった！

運のよさが870になった！

身の守りが562になった！

「お。レベルが上がったな」

「レベルってなんだー！？」

「愛の力は偉大って奴だ」

「いや、何かツコいいこと言ってくれちゃってんの？ てか別に力
ツコ良くなってるからね？ ただ干し肉食っただけだからね？

てか、そもそもなんで発光してんの？ ファンファーレの音はどこ
から？ この文字なんなの？ 力ってカンストしてね？ 爆流火山
って何の技だよ？」

突っ込みきれない。どうなってんだお前の体は。そもそも、人間
か？ 俺の知らないところで何か別の生命体に改造されてないだろ
うな？

「爆流火山はだな、呪文を唱えることで俺を中心とした辺り一帯を
灼熱の溶岩で埋め尽くす大技で……」

「それ自爆技じゃねえか！ 死ぬだろ」

肝が冷える。なんてとんでも技覚えてんだ。

「大丈夫だって。俺を中心とした辺り一帯、って言っただろ？ 中
心には影響ないから、俺は無傷」

「それってつまり、位置によっちゃ俺も巻き添え食うってことじゃ
ないか！」

「あー。そーいやそーうだな。わかった、ラアルがいるときは使わな
いようにする」

「てめえぶざげんな！ ラアルだけかよ！ 俺がいるときも使っな

！」

「えー……しょうがねえなあ。分かったよ」

エレクは渋々承諾した。

「ったく。そもそも、なんでそんなぶつ飛んだ技使えるようになってるんだよ」

「そりゃ、修行したからな」

「修行？ おまえ家事しかしてなかったじゃないか。家事でなんでそんな能力が身に付く？」

「家事を舐めるな！ 俺はラルルのためにそれこそ死ぬような思いで修行してきたんだからな！」

「なんでだよ！ 家事でなんで死ぬような思いをするんだよ！ おかしいだろ！」

「そんなの決まってるだろ。日々の糧を得るためには、食料調達しなきゃならないからだ。時には直角の崖を登ったり、熊と戦ったり、急流に飲まれながら魚を捕ったり、毒キノコに悩まされたりするだろうが。ああ、幻の食材を探して竜と戦ったこともあったな」

「おまえ、何やってんのー!？」

「どこの家に出稼ぎ行ったらそんなサバイバルな家事手伝いやらされるの!? 騙されてないか、おまえ!？」

「だから、修行だって言ってるだろ。俺とラルルが結ばれるために、先生の身の回りの世話をしたんだけどな。まあ、思い返してみればそのひとつひとつが今の俺の糧になっていたってわけだ」

「なんか前向きなこと言っちゃってるけど、それ結局良いようにこき使われただけじゃねーか！ 気付け！ おまえは騙されてる！ 現に、なんか体がおかしくなってるだろが！」

「騙されてなんかねーって。そりゃ、確かに時々先生の手料理食べると腹こわすこともあったが……」

「実験台にされてんじゃねーか！ おま、そこまでされて何故気づかない!？」

「だから違うって。クレッツは知らないかもしれないが、すげー高

名な人なんだぞ？ シェトウス・ラハンっていう」

「お前それ、魔女じゃねーかああああ！」

「あ、知ってたか。そうそう、そのシェトウス先生にだな」

「お前、シェトウス・ラハンって言ったら魔術狂のシェトウスじゃねえか！ 手料理ってそれ、確実に体のいい魔術の実験体にされてんだろうが！」

シェトウス・ラハンと言えば、その屋敷は常に何がしかの悲鳴やら怪しい煙やらがもれていると言う噂だ。確かに、魔術の能力自体は高く、王宮からの評価は高いらしいが。

「おいおい、そりやただの噂だよ。実際は人のいいおばちゃんだったから。ちゃんと最後に約束してたものもくれたし」

「あ」

そこまで言っつて、エレクは前方に視線をやった。そこには小さな子犬が鎖につながれていた。

「ああ、こんなところで犬なんか飼ってる奴いるんだな。まあ、普段はこの辺も山菜を取りに来る人も多いし」

「」

言いながら、エレクの視線の先に気づいて言葉を失う。エレクは犬の前に置かれた皿を凝視していた。

そこには、典型的な犬用ご飯 米に適当な汁物をかけた食べ物が置いてあった。

おい……まさか。

「これは……ッ！ ラアルの手作りランチ！」

「どうみても犬の飯だろ！？」

「攫われた身の上でも俺のことを想って愛情のこもった料理を作ってくれるとは！」

「ちょ、まて！ おま、それは犬が可愛そうって言うかそれ以前に人間として」

「待っててくれ！ 今すぐ助けに行くからな！」

「っつて食うな！」

止める間もなく、エレクは犬飯をかきこんだ。犬はその様を呆れたように見つめている。

吠えられる様子がないのは良いが……犬も見向きもしない飯を喜び勇んで食べるのは人間としてどうなのか。

食べ終わったエレクの体を、またもや柔らかな光が包み込んだ。再び、エレクの目の前に文字が浮かび出る。

エレクはレベルが100上がった！

エレクはレベルが778になった！

微塵切りを覚えた！

力が999になった！

賢さが25になった！

素早さ823になった！

運のよさが896になった！

身の守りが612になった！

「やっぱりレベルが上がるのかよ！」

しかも、パラメータの上がり具合が酷すぎる。さっきの干し肉よりレベルの上がり具合が良いってどういうことだ。技は料理スキルだし。

賢さ下がってるし。

「レベルも上がったし、さあ、行くか」

エレクは全く気にせず歩き出す。

おまえは少しは気にしろよ！

あれから俺たちは順調に魔王城への道のりを攻略していった。

魔王からの刺客やらお約束の四天王やは、エレクが薙ぎ倒してくれた。四天王と対峙する頃にはエレクのステータスは全カンスト（ただし賢さを除く）していたので、圧倒的な力の差でボコしてい

た。

ステータスがカンストしてることについては……触れないでくれ。俺ももう突っ込み疲れた。

ただ、そうだな……。最終的には食べ物以外もラルルの手料理だと言っただけでいい。あとは……察してくれ。

「おまえの言うとおり来てやったんだ！ ラアルを返せ！」

エレクは声を張り上げて魔王を呼ぶ。どうでも良いが、その元気はどこからやってくるんだ。

「ふはははは、よく来たな勇者よ！ 正直ここまでたどり着けるとは思わなかったぞ！ この女を返してほしくば、我から奪ってみせるのだな！」

どこからともなく魔王が出現した。ラルルをお姫様だっこしながら。

「と、言いたいところだが」

地に下ろしたラルルの背をとんと軽くつき、魔王は声の調子を変えた。

「なんだこいつは！ ワガママだし態度でかいし尋常じゃない力だし！ こつちから願い下げだ！」

見ると魔王の顔には青痣が出来ていた。殴られたな……魔王。

「ひどい！ あんなに私を弄んでおいて！」

ラルルは顔を覆ってさめざめと泣いて見せた。もちろん嘘泣きだ。そう。

ラルルは尋常じゃなく強い。純粋な戦闘となると相手にならぬだろうが、力比べであれば騎士にも劣らないだろう。まさに馬鹿力。俺がラルルをあまり心配していなかったのも、その気になれば自力で逃げ出すことぐらいは可能だと知っていたからだ。仮に鎖で拘束されていようが、鉄の扉で監禁されていようが、ラルルには関係ない。そのくらいは軽々と破壊できるだけの馬鹿力なのだ。

とは言え、ラルルはあくまでも馬鹿力なだけだから、放置するのも心配ではあったのだが。魔術でも行使されたらひとたまりもない

のだから。

「うるさいわ！　しかし、よくも我を騙してくれたな。さすが勇者！　まさか己の肉親をか弱き女性と偽って内部から混乱させるとは……油断ならぬ」

「ん？」

びし、と魔王は俺を指差した。待て、この流れで言つと勇者というのもしかして　俺か？

「貴様、よくも俺のラアルをこんな目にッ！」
お前のじゃねえよ。

エレクの叫び声が俺の思考を遮った。嘘泣きするラアルに駆け寄り、宥めるように背をさすっている。

魔王はエレクを憐れむように見下ろした。

「お主も、よくそいつを庇えるな。勇者に騙されているのか知らんが、憐れな奴よ」

「なんだと!？」

「悪くない容姿ゆえ我が妃にしてやろうと思ったが　そもそも男ではないか!」

あ、だから殴られてたんだな。初日から言い寄るとは手の早い。そう。ラアルは俺の弟だ。見た目は可憐な美少女にしか見えないが、真正正銘、歴とした男だ。

「貴様、ラアルを攫うだけでは飽き足らず　謂れのない悪口まで!」

ちなみに、エレクはラアルが女だと信じている。俺がいくら言うとも、冗談の一言で片付けてまったく疑おうとしない。それどころか、俺がシスコンで妹を嫁に出したくないゆえの妄言だとさえ思っている。

「エレク……」

伏せていたラアルはエレクに縋りつき、弱弱しい声を出した。

「どうした、ラアル」

「あいつ、私を妃にしてやるって言って……無理矢理私を……っ。」

「すごく怖かった……！」

「何い！？」

「さて、無理矢理も何もちょっと胸触った程度だろうか！ それも、顔面容赦なくぶん殴つたいてそれはないだろう！？」

「貴様、ラルルの胸を触ったのか……？」

エレクは背に黒い影を負って魔王へと振り返った。

「待……、ちよつと触った程度だと言っておろうが！ というか、そいつは男ではないか、何をそんなに……！」

「貴様、よくもラルルの肌を汚したな！」

「おい勇者、なんだこいつは！ 我の話を聞いてないのか」

「そいつは誰の話も聞きゃいねえよ。意思疎通は諦める」

「お主、それでも友人か……！」

ぶち切れたエレクは、容赦なく魔王をぶん殴った。ステータスがカンストしているエレクにとって、魔王はもはや敵ではなかった。顔面が容赦なく変形していく魔王は、見ていてさすがに憐れだった。

「いや、すごいな。マジで」

魔王の顔は原形をとどめていなかった。もともと整っていた顔が台無しだった。だからこそ、エレクは腹いせに顔を中心に殴ったのかもしれないが。

俺は今、魔王を拘束している。とりあえず役所に引き渡すことにしたのだ。この魔王からはまだ人的被害がないので、大した罪には問われないだろう。

「なんなんだ、おぬしの友人は……」

「人外だ」

「……さすが勇者というわけか」
「なんか変なところで感心された。」

「いや、冗談なんだが」

「くそ、桁違いの力をもつ肉親と、尋常じゃない戦闘力を持つ友人をまとめる勇者だと？ 何故よりもよって私の時代にこんな厄介な人間がおるのだ。やってられん」

「いや、まとまってないからね？ あいつらめっちゃ好き勝手に行動してるだけだからね？」

「しかし、あやつはあれのどこがいいのか」

魔王はエレクに視線を向けた。エレクは今、冒頭のプロポーズを再び繰り返している。

「顔じゃね？」

「……」

魔王は黙った。

「ま、ラアルもエレクの前では気を持たせた態度とってるしな。騙されてるって面もなくはないんだが」

「……実は両思いだったのか」

「違いよ。そこがラアルの性格悪いとこでな。振り回されてるエレクを見るのが好きなんだと。ま、ある意味真の悪女だよな」

「そうなのか？ それでは、あれは合意の上ではないのか」

「ん？ あれ？」

言われて魔王の視線の先を追って固まった。

エレクは、ラアルを押し倒して口付けていた。

「何やってんだお前らあああ！」

思わず魔王を放り出してエレクとラアルを引き剥がす。

「ぐ……っ、けほ……ッ、助かった、クレツッ」

「邪魔するなよ、クレツッ」

「邪魔するなじゃねえよ！ なに無理矢理キスしてんだ！ 性別云

々はおいとしても、相手の意思を無視するなんて男の風上にも置けねえ！ 見損なつたぞ、エレク！」

「無視なんかしてねえよ、ラルルも俺の気持ちを受け入れてくれたんだぞ？」

「嘘つくな！」

「嘘じゃねえって。ラルルだって異種族でさえなければ俺と結ばれたのにつて言ってくれたんだぜ？」

「……ラルル？」

俺はじと目でラルルを見やる。

「え、いやまあ……天使だからエレクとは結ばれない、みたいなことは言つたけども」

「天使云々吹き込んだのはお前かああ！」

「いや、だって、それでも言わないと押し切られそうだったし」

「だから、俺はラルルの望みを叶えるべく、ラルルと俺との障害を取り払う薬を貰ってきたんだ！」

「え？」

「なんだって？」

「いや、長かったよ。シエトウス先生に弟子入りして、材料集めて「ちよ、ちよつと待て」

もしかして、薬を貰うためにシエトウスに弟子入りしたのか？

それならば確かに、シエトウス・ラハン以上に適任者はいないが待て。

エレクとラルルとの障害を取り払う薬、だと？ それはどういう意味だ。現実問題、エレクとラルルの間の問題といえば性差だ。それを取り払うといえは

「その薬を、さっきラルルに飲んでもらったんだ。口移しじゃないと効果がないって言われたから、結果的にああなつたけど。これで俺たちの間に障害はないぜ、ラルル！」

「っぎゃああああ！」

先に気づいたラルルが、自分の体を見て悲鳴を上げる。そこには

パッドを押し上げる豊満な胸が存在していた。

おそらく、本人にしか分からないであろう変化も確認できていることだろう。ラルルは真正銘の女になっていた。

「てっ……めえ、ふっざけんなああああ！」

ラルルはエレクのみぞおちにこぶしを見舞った。エレクは壁にぶつかるまで吹っ飛び、気を失った。

さすがラルル。カnstトしたエレクにも負けないとは。

「はあ、はあ、はあ……っ、ふざけんなエレク！ クレツツ、止めるなよ。叩きのめしてやる……ッ！」

「落ち着けよ、ラルル。そもそも、自業自得だろうが。あんまりエレクをからかうからこうなるんだぞ」

「だからと言って、まさか女になる薬を持つてくるとは思わねえよ！ くそ、いくらからかった俺に非があったとしても、代償が大きすぎるだろ！」

「まあ、確かに予想外だがな……」

「ふむ。性転換か」

魔王がポツリと呟いた。やべ、すっかり忘れてた。

「魔王か！ 何か元に戻る方法知らねえか？」

「なんにでも継りたいのだろう。ラルルが訊く。」

「そうだな。心当たりはなくてもないが……条件がある」「なんだ」

「拘束を解いて今回の件をなかったことにしてくれれば、知り合いに引き合わせてやっても良い。どうだ？」

「……本当に元に戻るんだろうな」

「ふむ。魔族にとって、性を変えろということとはさほど難しいことではない。我とて、どちらの性も思いのままだ。残念ながら、我は自分にしかそれを適用できぬがな」

「なるほど」

確かに、魔族は確かな性を持たぬものが多い。魔王の言葉は信憑性があった。

「だが、私の配下には性を操るに長けた者もおる。そやつなら、他人の性を操ることもできるやもしれぬ」

「なるほど……確かにそれなら、可能性ありそうだな。どうする？
ラルル」

「そんなの、考えるまでもねえだろ」

ラルルは魔王の拘束を解いた。

「本当に良いのか？」

手を差し出す俺に、魔王は躊躇ってみせた。

「ラルルがあれじゃな。それに、お前はまだ人間に手を出してねえし、そこまで恨みがあるわけでもないしな。助けてくれるっつーなら、今回の件を目を瞑るくらい訳ねえよ」

「ふむ。ならば契約成立だな。約束どおり、我も手を貸そう」

魔王は俺の手をとった。引き上げてやると、魔王はゆがんだ顔でニヤリと笑って見せた。

魔王と俺たち勇者パーティ。異色な組み合わせが今日ここに誕生した。

ラルルの体を元に戻すために、これから騒々しい旅が始まることになるのだが、それはまた、別の話。

(後書き)

ここまでお読み頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2202p/>

腹ペコ冒険譚

2010年12月1日19時55分発行